

ヒューマンドキュメンタリー映画

『えんとこの歌 寝たきり歌人・遠藤 滋』 プレスリリース

えんとこの歌

寝たきり歌人・遠藤 滋



激しくもわが扱ひ所探りきて

障害持つ身に「いのちにありがとう」

「えんとこ」は

遠藤滋のいるトコ。縁のあるトコ。

ありのままのいのちを生かし合いながら
生きる・・・トコ。



〈ドキュメンタリー映画〉 伊勢真一 監督作品 2019年/カラー/96分/製作:いせフィルム <http://www.isefilm.com>



いせフィルム

TEL: 03-3406-9455 FAX: 03-3406-9460 メール: ise-film@rio.odn.ne.jp

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-9-4 トーカン渋谷キャスティング406 * 2018年4月より住所が変更になりました

HP: <http://www.isefilm.com>



えんこの歌

寝たきり歌人・遠藤 滋



序文 (カントクのつぶやき)

ベッドの上で寝たきりの暮らしになって
もう35年になる遠藤の詩は、
世界中の人々へ向けたラブレターみたいだ。

(演出・伊勢真一)

「だって、
君はひとりで勝手に
何かをやってゆくことなんてできないだろう？」

ここのところ編集に取り組んでいる映画『えんこ』の続編『えんこの歌』で使われている、脳性マヒの友人、主人公・遠藤滋の詩の冒頭の一節だ。

ベッドの上で寝たきりの暮らしになってもう35年になる遠藤の詩は、障がいのある仲間、一人ひとりへのメッセージのようであり、介助の若者達への語りかけであるようにも受け取れる。
更に、学生時代の友人である私や同世代の仲間達への遠藤の連帯のアピールであるようにも思える。
大げさかもしれないけど、世界中の人々へ向けたラブレターみたいだ。

「君が今やりたいことを、まっすぐに人に伝えながら出来ないことは、みんなに手伝ってもらって堂々と生きてゆきなさい。

先回りして、人がどう思うだろうか、これはいけないことではないかとか、勝手にひとりで考えてやめてしまう必要なんかないんだよ。

自分から逃げているは何も始まらない。

そうして、自分が決めてやったことの結果を、どんなことでもすべて自分で生かしていったら、その時はきっと、いつの間にか、ますます、すばらしい君になっているだろう。

それは、人に迷惑になるどころか、逆に人と人とが直接、そのいのち・・・を生かし合って生きる。

本当の人のあり方を、君に関わる全ての人に身を持って示して、それを実現してゆくことになるんだよ。

だって、
君はひとりで勝手に
何かをやってゆくことなんてできないだろう？」

遠藤のこのメッセージの力強さは、何より、ベッドの上でひとりでは何も出来ない日々を送って来た、自分自身に向けての切実なエールだからだろう・・・

詩も音楽も映画も、全ての表現は、まず自分自身に向けて語りかけられるもののような気がする。
自問自答こそが表現のはじまり・・・
往々にして、自分を素通りして、他の人にわかってもらおうとし過ぎるものだ。
どこまでも自分に向けて、考えを深めること。

「自分の足で歩こうという思いを諦めない遠藤のように私は生きようとしているだろうか・・・」
『えんこの歌』のチラシのリードに、私は書きとめた。

ベッドの上で生き続けて来た遠藤が、伊豆の海で歩く姿を眼の当たりにした時、「生きる」ということを、他人事ではなく、自分のこととして、思い返さないわけにいなかったのだ。

青くさいことを言うと笑われるかもしれないが、そう思われてもかまわない。
無我夢中で映画を創りながら、オマエはどう「生きる」のかと、自分に問い続けて来たような気がする。

今だに、答えにたどり着かないけど。
自問自答で問い続ける思いがあるうちは、映画を創り続けるのだろう。他の人の力を借りながら。

「だって、君は・・・」



えんこの歌

寝たきり歌人・遠藤 滋



制作背景

「共に生きる」方向に
私たちの社会を押し戻さなければ...

2016年の夏、神奈川県相模原市で起きた出来事を覚えているでしょうか……。忘れるわけがない、と言う人も、そう言えばそんなこともあったと思う人もいます。

いつの頃からか、私たちの社会では次々に情報が消費され、忘れてはならないこと、大切なことが置き去りにされているような気がしてなりません。

相模原市で起きた出来事、相模原障がい者大量殺傷事件について、犯人が捕まって事が済んだとは、私たちは思いません。陰惨な事件を起こした犯人を産み育てた私たちの社会の有り方を、一人ひとりが考えること、考え続けることがなされているとは思えないからです。

「共生社会」と言いながら、私たちの社会は「共に生きる」ことを、本当に実現しようとしているのでしょうか……。

— 「えんこの歌」のワンシーンから —

主人公 遠藤滋の横顔

(ナレーション) 老いと共に遠藤の障がいは進行しています。

遠藤、介助者に必死で語りかける

無声音のささやき

「コトバだけだよね。」

遠藤の鋭い眼差し

「一億総活躍なんて言っちゃって……」

語りかける遠藤、聴きとろうとする介助者

(ナレーション) それでも遠藤は介助者と語り合い

介助者の力を借りて

考えることを止めません。

「共に生きる」方向に
私たちの社会を押し戻さなければ……。

恐ろしき事件ならずや十九人
元職員に刺殺さるとは

(相模原の事件に寄せて)

遠藤 滋





えびこの歌

寝たきり歌人・遠藤 滋

イメージカット



自らのいのちに立ちて生きあえる
絆を求め我は生き来し

足熱し身体も熱し痛し苦し
かく叫びいて今日も明けゆく

手から手へ都会の底に渡さるる
わがいのちこそ漂流せるかな

激しくもわが扱ひ所探りきて
障害持つ身に「いのちにありがたう」

手も足も動かぬ身にていまさらに
何をせむとや恋の告白

自らを他人と比ぶることなかれ
同じいのちは他に一つなし





えんこの歌

寝たきり歌人・遠藤 滋



“えんどこ”のこと

“えんどこ”とは.....



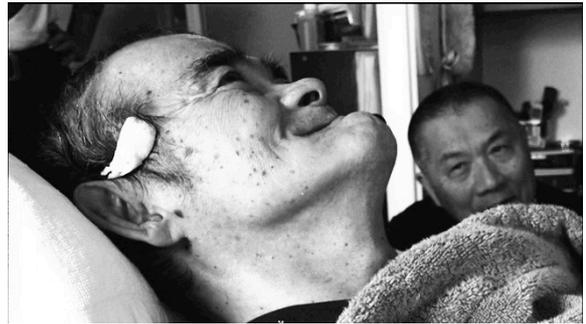
遠藤滋の居るところであり、縁のあるところ、という意味で名付けられた、いのちを生かし合う居場所。

遠藤滋の日々は、東京・世田谷にあるマンションの2DKの部屋で、介助者たちの手を借りた24時間体制での介護によって営まれている。“えんどこ”には34年間で2,000人を越える若者たちが集まり、今なお介助者の募集がつづいている。介助料は「障害者総合支援法」の「重度訪問介護」という枠を利用することで支払われている。

問合せ：結・えんどこ
TEL・FAX 03-3327-1523
MAIL entoko.shigeru@nifty.ne.jp
HP <http://entoko-net.com>

遠藤 滋 (えんどう・しげる)

1947年静岡県清水市生まれ。仮死状態で生まれ甦る。1歳の頃脳性マヒと診断される。障がいがありながら大学を卒業、重度障がい者として東京都で初めて教員に採用され、母校の光明養護学校で国語教師となる。しかし、障がいが進行し教壇に立つことができなくなり、寝たきりの介護生活が始まる。自ら“えんどこ”を組織し、介助者たちの力を借りながら自立生活をつづけ、34年になる。東京・世田谷のアパートの一室、“えんどこ”のベッドの上から、社会や自分自身を凝視するその眼差しで、50代から短歌を詠みはじめる。



映画『えんどこ』〈シリーズ1作目〉



だって、君はひとりで勝手に何かをやってゆくことなんて出来ないだろう？

えんところは縁のあるトコ。寝たきりの障がい者・遠藤滋のいるトコ。一日24時間三交代で彼を介助する若者たちが垣間見せる生き生きとした表情など、彼らの日常を3年間にわたって記録した。監督の学生時代の友人・遠藤滋と若者たちを描いた「青春」ドキュメンタリー。(100分/1999年)

《キネマ旬報文化映画ベストテン7位》
《朝日新聞・今年の映画五選》





えんこの歌

寝たきり歌人・遠藤 滋



スタッフ

映画 『えんこの歌 寝たきり歌人・遠藤 滋』

2019年／カラー／1時間36分／ハイビジョン（16:9）
DCP・HDV・DVカム・ブルーレイ・DVD

出演——— 遠藤滋 「結・えんこ」介助者のみなさん
短歌朗読—— 友部正人
撮影——— 石倉隆二 宮田八郎 安井洋一郎
録音——— 永峯康弘 井上久美子
音響効果—— 米山靖
編集——— 尾尻弘一
テーマ曲—— 「不屈の民」 編曲 横内丙午
演奏——— 谷ぐち順 菅原雄大 藤原亮
宣伝デザイン—— 森岡寛貴(ジオングラフィック) 遠藤郁美
上映デスク—— 鷺見真弓 今井亜矢子
協力——— 伊勢朋矢 矢吹寿秀 福島広明
あけび短歌会 大津留直
制作協力—— クロスフィット ハチプロダクション 一隅社
上映協力—— エーザイ株式会社
企画制作—— いせフィルム
演出——— 伊勢真一



演出・伊勢真一（いせ・しんいち）

ドキュメンタリー映像作家。1949年東京都生まれ。『えんこの歌』主人公の遠藤滋とは、学生時代の友人である。長編ドキュメンタリー映画のデビュー作は、てんかんと知的障がいをもつ姪っ子の奈緒ちゃんとその家族の日々を記録した映画『奈緒ちゃん』（毎日映画コンクール記録映画賞グランプリ他多数受賞）。1999年に本作の前作となる映画『えんこ』を発表し、その後も撮りつづけた記録をベースに『えんこの歌』を完成させた。本作は、映画『えんこ』から20年を経た続編である。



えんこの歌

寝たきり歌人・遠藤 滋



上映の予定

相模原での事件が起きたのは2016年の7月。
映画『えんこの歌』は、その7月に劇場公開をスタートする予定です。
より多くの方に観ていただき、観た人ひとりひとりの心のなかに巡る
さまざまな思いを、ぎゅっと深めてもらえたらと願っています。

また、一足早く行われる2月の完成上映会をきっかけに、
積極的に上映活動に取り組む心づもりです。
完成上映、劇場公開、そして自主上映と、上映の輪を拡げていきます。
新作『えんこの歌 寝たきり歌人・遠藤 滋』の現段階での上映予定を紹介します。

完成上映会

2019年 2月3日 (日) ————— 東京完成上映会

その他、横浜、大阪、秋田、岩手、仙台、広島等、各地で完成上映を行う予定です（詳細未定）。

劇場公開

2019年 7月 から 東京・新宿K' s cinema (ケイズシネマ) にて公開予定

その後、大阪・シアターセブン、名古屋・名演小劇場、横浜・ジャック&ベティ、三重・伊勢 進富座、
金沢・シネモンド、京都・京都シネマ、静岡・シネギャラリー、浜松・シネマイーラ、広島・横川シネマ他
全国各地のミニシアターで上映予定。

自主上映

2019年 春から、全国各地で自主上映に取り組めます。

伊勢真一監督作品は、自主製作の処女作『奈緒ちゃん』以来、
20数年間にわたり自主上映を中心に観られてきました。

前作である映画『えんこの歌』の上映実績は、およそ500カ所におよびます。

新作『えんこの歌 寝たきり歌人・遠藤 滋』も、自主上映に積極的に取り組む心づもりです。

観た人から次の人に、上映のバトンを手渡していく
いせフィルムの自主上映ネットワークを駆使して、
一人でも多くの方に映画を観てもらいたいと考えております。

〈上映の問合せ〉いせフィルム www.isefilm.com

TEL. 03-3406-9455 FAX. 03-3406-9460 E-mail. ise-film@rio.odn.ne.jp

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-9-4 トーカン渋谷キャステール406

* 2018年4月より住所が変更になりました